

モーリス・ルイス（1912-62年、アメリカ）は、キャンバスに色とりどりの絵具を浸み込ませて、色彩の美しい広がりを表現した画家です。愛知県美術館には、このルイスが1960-61年に取り組んだ「アンファールド」（「広げられた」）というシリーズに分類される《デルタ・ミュー》があります。高さ3メートル弱、幅6メートル弱の巨大な作品ですので、見覚えのある方も多いと思います。



▲モーリス・ルイス 《デルタ・ミュー》 1960-61年 愛知県美術館蔵 （2008年8月1日撮影）

実はこの作品、1996年に購入した時から、展示の上でちょっとした問題を抱えていました。まず、作品の四側面が板ですべてぴっちり覆われていました。これは、作品を移動させる時などには、板の部分を持てば作品そのものに直接手を触れずにすむため、作品保護の観点からは良いことなのですが、別の観点からは一考を要する問題でした。というのは、赤や青や黄の色彩の流れはすべて側面部にも及んでいるのですが、その美しい側面の在りようがまったく見えない状態になっていたからです。



▲展示室の壁から取り外しているところ。巨大な作品だけに、大変な苦勞です。

次に、四側面を覆う板には金色の装飾物が付けられていて、このため、画面はピカピカに縁取られていました。これが、この作品の持つ広々とした感覚を害してしまっているように、私などには感じられたのです。

そういった個人的な考えを同僚の保存担当学芸員に話した際、彼女は彼女で、《デルタ・ミュー》のストレッチャーの構造やキャンバスの張りに危惧を感じており、機会があればそれらを改善すべきだと考えていたことも判りました。

それで、アメリカのルイス研究の第一人者の方、ルイス作品を数多く手がけている国内の修復家の方などのご意見をお聞きしつつ、それらの問題点を館内で慎重に議論しました。それと前後して、川村記念美術館さんからこの作品の貸出し依頼をお受けしたので、それを機会として《デルタ・ミュー》に本格的に手術を施そうということになったのです。



▲川村記念美術館から帰ってきた《デルタ・ミュー》。大きすぎて、そのままでは当館の建物から運び出せなかったため、ロール状にしてお貸しし、同じくロール状で戻ってきました。

結局、ストレッチャーの裏面にループ状の帯を何箇所か取り付けて、作品を移動させる際にはそこを持って良いようにすることで、四側面を覆っていた板（そして、それに伴って、画面を囲っていた金縁）をすべて取り外すことにしました。



▲作品を動かす時は、この輪っかをつかんで作品を持ちます。

その他にも、さまざまな改良を加えた特製ストレッチャーに取り替えたりしています。今まで以上に美しく生まれ変わった《デルタ・ミュー》がどんなふうになっているかは、ぜひ当館にお越しいただいて現物をご覧になってください。当分の間、所蔵作品展示室の方で展示されていますから。



▲新ストレッチャーに張り込む直前の《デルタ・ミュー》。ここで見えているのは、この絵の裏面です。絵具はすべてキャンバスに浸み込んでいるので、裏面にも色彩の美しい流れが現れています。

このたびのモーリス・ルイス《デルタ・ミュー》に対する処置については、なるべく早くに正式に文書にまとめて、同種のルイス作品を所蔵する他館にご参考にしていただけるようにしたいと思っています。

(T.O.)